

至誠の人 吉田松陰 (三)

講談師 一龍斎貞花

幕末の激動の中で、高杉晋作は度々に立つたのでございます。

登場するものの、その戦いぶりは余りドラマに描かれないが、松陰四天王の一人高杉の、小よく大を制するの働きを紹介しなければいけないと思う。

高杉晋作決起

安政元年、師松陰が処刑された一月後、高杉は藩の重役周布政之助に「我が師松陰の首、遂に幕吏の手に掛け候の由、仇を報い候らわで安心仕らず候」と手紙を。

「このような幕府に信頼はおけない、自分たちの手で新たな日本を切り拓こう」と決意。

維新へと大きく躍動し、戦いの先頭

に立つたのでございます。

長州から砲撃を受けた外国は、報復の猛攻。藩の砲台は壊滅、高杉が和議交渉。

藩内では、幕府の大軍による長州征伐に、恭順すべきという守旧派が台頭。身の危険を覚えた高杉は、一時筑前に逃れ野村望東尼にかくまわれていたが、長州に帰り元治元年十二月、クーデターを起した功山寺決起。

「長州男児の腕前をお見せする」

この呼びかけに応えた、高杉創設の奇兵隊八十人。下関周辺の藩役所を次々と襲撃。この勢いに、人望のあつた久坂玄端と違って、乱暴な高杉には人望が少なかったが、松陰の草莽掘起

の教しえを受けた。伊藤俊輔(博文)、山県狂介(有朋)はじめ民衆が続々と集まり、クーデター成功により高杉は藩政への発言力を高め、長州は、再び幕府打倒を目指したのでございます。

薩長同盟成立

「徳川幕府によって日本を収めることは最早むつかしい。力のある薩摩や長州などの勢力が手をたずさえて国を動かす、諸外国と渡り合うこと」という勝海舟の言葉に、弟子の坂本龍馬が薩長同盟に奔走。

長州は武器がほしい、薩摩は米の確保に困っていた。龍馬の創設した貿易商社亀山社中の仲介で、中古のゲーベ

ル銃三千挺、ピストル四千三百挺その他合計一万六千挺の銃を九二、四〇〇両で購入、約三十五億。今も昔も軍備には金がかかる。かくして険悪だった薩摩と長州の同盟成立。

長州一番が、時代の回天の先頭に立つてなぜ戦うことが出来たか、多額の戦費はどうしたか、ご不審の方もありませんよう。

巨額の軍資金をまかなえたのは、藩主毛利敬親に抜擢された村田清風の天保の藩政改革があったればこそ。

清風は農村の実態調査を行い、藩債の整理、藩直営の物産会所の再編成と拡充、藩専売制の強化など、財政立て直しを図るとともに、藩校明倫館の整備・拡大を進め人づくりに励み、西洋

式の大操練を実施、富国強兵策の成功が、維新への先頭に立てたのである。

財政再建、人材育成は企業にとつて最も大切な課題です。

慶応二年第二次長州征伐、幕府軍は小倉城を本陣に五万の兵。迎え撃つ高杉軍わずか千人。戦場は関門海峡。

五〇倍の兵力に立ち向かうため、高杉は周到な準備。関門海峡を綿密に測量。幕府方にスパイをもぐり込ませる。このスパイの情報によって幕府軍の動向を把握。

松陰が推奨した「飛耳長目」、遠くの事象を耳と目でとらえる情報収集。

ライバルに勝つには、正確な情報収集は当然のこと。

幕府軍の攻撃予定日前日の六月十七日未明、濃い霧に紛れて軍艦五隻出陣、坂本龍馬乗り込んだ軍艦も。田野浦の幕府軍に艦砲射撃、下関の砲台からも一勢に射撃。高杉は酒をぐいぐい飲みながら指揮。酒樽を開いて兵に飲ませるの戦いには龍馬も啞然としたという。不意をつかれた幕府軍は大混乱。

緒戦に勝利した長州軍幹部は、「この勢いで小倉城進撃を」と進言するも、

高杉は全軍を下関に撤退を指示。小勢で深追いは危険と考えての作戦。

奇襲と退却を繰り返す、幕府軍を切り崩していく。幕府軍に頼みの薩摩は加わらず、兵器も旧態依然に對し、ゲーベル銃や、更に命中率の高いミニエー銃を駆使する長州軍。

おまけに、前線での長州との戦いは、地元の小倉藩に押しつけられ、他藩の兵は戦場から離れた小倉城の周囲に配置され、まるで小倉軍対長州軍の様相。さらに、この年は猛暑とあつて長期

戦に及ぶにしたがつて病気が蔓延、食料もそれぞれ調達することになつていて諸藩は食糧不足。戦いに兵站は重要。戦意は劣えるは、戦術戦略の天才高杉の指揮に翻弄されるばかり。

はかばかしくない戦況の中、将軍家茂が大坂で客死。幕府連合軍は成果を上げることなく、長州から撤退。

五万の大軍にわずか千人で立ち向つた長州軍。戦力一対五〇、一が五〇倍の敵を敗つたのです。

“小よく大を制する”といわれるが、それには情報収集、そして自軍の特性を把握し駆使する。

町工場が成功しているのも、自社の有する特性を活かしていればこそ。

松下幸之助さんも、町工場のお蔭で窮地を脱したことがありました。

高杉維新回天を見ずして死去

小倉城炎上の時、高杉は咯血し病の床に。高杉は療養のため、下関・桜山の招魂場近くの家へ。結核が伝染病であるため配慮してのこと。

招魂場は、高杉の発議によつて慶応元年、殉国の志士の神霊を捉るために建てられ、吉田松陰・久坂玄端はじめ三七〇余柱が祀られ、勿論高杉の碑も。(下関市上新地)

維新回天に殉じた人々の霊をとむらうために創建されたのが靖国神社だが、当初は招魂社、同じ長州の大村益次郎が九段の地を選び創建に尽力し、銅像が建てられている。境内の桜も桂小五郎(木戸孝允)が自宅の桜を移植したことにはじまる。

慶応三年十月大政奉還、十二月王政復古により新政府樹立。

慶応四年戊辰戦争開戦。新政府軍対

旧幕府軍の戦い。新政府軍の中心は長州、松陰の教しえを受けた弟子たちが

主導し、日本は新時代を迎えたのです。高杉は、戊辰戦争に参加することなく、維新を見ることなく、慶応三年四月十四日、下関に於て二十九歳の短い生涯を終えました。

決起した下関の功山寺に、馬上の高杉晋作像が建てられています。

松陰の弟子達の中で、伊藤博文、山県有朋、品川弥二郎、山田顕義、そして木戸孝允と命を長らえた者が、明治政府の要職に、公卿の岩倉具視も。矢張り長命の大切さといえましよう。

次号、準主人公ともいえる小田村伊之助(楫取素彦)と文(美和)を紹介し最終回といたします。